

日本菌学会会長に再選されて

日本菌学会会長 原 田 幸 雄
(平成13年度～14年度)



この度はからずも本会会長に再選され、その責任の重さに身の引き締まる思いをしております。ここに過去二年間の職務を振り返りながら学会運営上の課題と抱負を述べたいと存じます。

学会誌は1994年に英文誌「Mycoscience」と和文誌「日本菌学会会報」に分離されました。Mycoscienceには多彩な論文が掲載され、vol. 40 (1999) では560頁、さらに vol. 41 (2000) では680頁と総頁数に関しても目覚ましい充実ぶりを示し、国際誌として定着してまいりました。しかし、Mycoscienceの編集に関わる編集委員長をはじめ編集委員各位の負担は著しく増大しました。恐らくこの事が原因となって、若干の発行遅れを招いているのでしょう。学会誌の発行の遅れは学会誌そのものの評価に影響を与えかねません。早急に新たな編集・出版体制を検討する時期にきたと考えております。

一方、英文誌に比べ和文誌(日菌報)の内容に関する

検討が遅れています。年4号、総頁数200前後の紙面には多くの会員がやや物足りなさを感じておられるに違いありません。私は日本の菌学の正しい発展には日菌報の充実が欠かせないと信じております。号数、頁数、記事の内容などの再検討が必要でしょう。菌類の研究では地域間の情報交換が大事なことは言うまでもありません。本会には現在、東北支部、関東支部、西日本支部の3支部があり、さらに北海道や九州にも支部が誕生することを望んでおります。そして北から南まで各支部が日菌報を通じて密接に連携し、菌学の発展にご尽力くださる事をお願いいたします。

学問の国際化はあらゆる分野に波及してまいりました。昨年11月30日、12月1日の両日、つくば市において本学会主催第7回国際シンポジウムが開催されました。海外からの招待講演者は3名にとどまりましたが、参加者150名を超える盛会で、学界の潮流を見定めようとする

る参加会員の積極性に感銘いたしました。最近各国で菌学関係の国際会議が次々と開かれ、出席した本学会会員が日菌報に参加記を寄せられ、会議の雰囲気を紹介してくださることは大変有益です。国内外の関連集会の最新情報は日菌報の掲示板で紹介されますので、是非ご一読ください。

2000年度第3回および第4回理事会議事録にもありますように、現在日本菌学会とアメリカ菌学会との間で合同年次大会を2005年ハワイで開催することについて協議しております。詳細につきましては、本号の学会記事をご覧ください。なお、本件につきましては本年度の総会に諮り、承認後実施に向け作業を開始する予定であります。

さらに2006年（平成18年）には、本会は創立50周年を

迎えます。この大きな節目に相応しい記念事業を計画立案すべき時期になりました。前期に引き続き、行事・出版等検討委員会で本格的に検討したいと思います。その先行事業の1つとして「日本菌学史」（仮称）を出版する準備が既に進行しております。

昨年7月の元会長平塚直秀先生のご逝去によって、本会は生みの親・育ての親をまた一人失いました。創設者たちは本会に自由闊達な精神を育まれました。私たちはこの美しい伝統を受け継ぐことを誇らしく思います。と同時に清新な気風と活気に満ちた学会を維持するため一層の努力をせねばなりません。微力ながら会の発展のため精一杯努力する所存であります。会員諸賢のご支援とご鞭撻をお願いしてご挨拶といたします。